

70年かけた辞書づくり

2020年11月
眞鍋由比

シェイクスピアは英語辞典もなくあの戯曲群を書き上げた。あの時代は英語の辞書はなかったんだ。『博士と狂人』サイモン・ウィンチェスター著 ハヤカワ文庫 2006 を読んだときの一番のショックはこれだった。あの膨大なセリフのなかに使われている言葉、たとえばElephantということばの意味を、用法を、彼はチェックすることはできなかった。聴衆の思いと微妙にちがう意味で使っていたかもしれない。いや、俳優たちともちがっていたかも。誰も言葉の意味を客観的に判断できなかった、辞書ができるまで。

辞書を読むのが幼い頃から好きだった。自分には知らない言葉があって、背景があって、文化の切れ端にふれることができる。辞書はそれ時代が宇宙だ。人とコミュニケーションをとるためのことばには絶対に同じ意味が、定義がなければならない。同じ言葉を使っても意思疎通が難しい場合があるのに。

イギリスのOED (Oxford English Dictionary) のプロジェクトの100年前にジョンソン博士が編纂した英語辞典がある。ジョンソン博士は優秀な文筆家でOEDより100年早い彼の辞書は高い評価を得ているが、「良い」と判断した言葉しか収録していない。辞書は良かれ悪しかれ、程度の高低に関わらず使われていることばを全て載せないと意味がない。目録として。いつから使われて意味がどう変わってきたか。途方もない大作業。。

スコットランドの貧しい家の出である元教師マレー。編集主幹に任ぜられたとき、プロジェクトは創立から20年たっていたが、まだ1冊もできていなかった。しかし彼がやっとA～Bの巻を出したとき、評判がよくなって支援を渋っていた貴族や女王が支援を約束し軌道に乗った。しかし様々な時代の単語の最初の用例文を多くの閲読者（ボランティア）に頼んで見つけ出してもらわねばならない。それを郵便で送ってもらって編集する。気の遠くなるような作業だ。（彼の前任者のときは、読んでもらうために送った本を返さないボランティアが多かったらしい。勝手に自分のものにしてしまった。）

その閲読者の一人として最高に活躍したのがマイナー。イギリスの辞書にアメリカ人も協力したというのは素敵な話だが、マイナーが南北戦争で病んでいった話もショッキングだった。南北戦争の終わりごろ、アイルランド人たちはもう自軍（北軍）の優勢は決まっているし、自分の国こそイングランドから独立しなきゃいけないから帰ろうとして脱走して、罰を受ける。拷問の末のDの字の焼きごてを頬にあてる仕事を、軍医であるマイナーはやらされていた。それでなくても過酷な戦場で手や足がもがれた悲惨な兵士を山ほどみてきたのに。人を癒すはずの医者が脱走しただけの兵士に焼きごて？それが仕事だなんて。精神を病んで退役し、イギリスに渡った。病状はよくなり、心神耗弱時に人を射殺し、精神病院に入れられた。マイナーはしかし、退役軍人だから給料もアメリカから出ていて、実家も裕福だった。他の囚人とちがって二部屋もらって、一部屋は豊かな書庫だった。古本屋からさまざまな稀観本を集めて読むのだが、やはり自由というわけにはいかない。犠牲者の妻には、マイナーの義妹から賠償金が払われていたが、マイナー自身もできるだけ支払って、お詫びしたい、お会いしたいと連絡し、なんと面会にきてくれた。その時に、なかなか古本屋から本が買えないと愚痴をいったら、なんと未亡人はロンドンから本をいくつか買ってきてくれたのだ。そのなかにマレーが辞書編纂のための閲読者募集のチラシが入っていた！（ここは映画とは違って、史実の方がロマンティック）

三浦しをんの『舟を編む』を読んだとき、辞書を編集し始めた青年が壮年になって出来上がった辞書を、編集に関わった老学者の先生に見せたかったと後悔する場面が切ないと思ったけれど、70年もかかっていたら生存しているほうが珍しい。全12巻もの壮大なOED（第1版）が出来上がったのは二人の死後だった。後の世につながっていく壮大な仕事に関われたことは誉れだったろう。けれど想像できないくらい疲弊もした。映画ではたった一語bondmaid（女奴隷）を落としただけで理事会に責められて、クビになるところだった。

日本語にも最大の辞書**日本国語大辞典第二版（全13巻）小学館 2002** があります。一つ一つの言葉がいつ最初に使われ、何時代に意味がかわり、現在の意味はこれ、と用法が丁寧に掲載されています。こちらも本当に素晴らしい辞典で、もちろんうちの図書館で所蔵しています。ぜひ読んでみてほしい。（そう、紫式部は辞書もないのに『源氏物語』を書き上げたんですよ。）この辞書にもしられざるドラマがあるんでしょうね…。

こちらはオックスフォード大学図書館のラドクリフカメラ。映画にもでています。ロンドンやオックスフォードの町が舞台ですが、大学の辞書編集理事会ではアイルランドのトリニティ・カレッジの図書館がロケに使われていました。ためいきがでるほど美しい図書館です。

